

弥陀の誓願不思議にたすけられまゐらせて、往生をばとぐるなりと信じて念仏申さんとおもいたつころのおこるとき、すなわち撰取不捨せつしゆふしやの利益りやくにあづけしめたまふなり。

弥陀の本願には、老少・善悪のひとをえらばず、ただ信心を要とすとしるべし。

そのゆゑは、罪悪深重・煩惱しじょう盛さかの衆生をたすけんがためめの願にまします。

しかれば本願を信ぜんには、他の善も要にあらず、念仏にまさるべき善なきゆゑに。悪をもおそるべからず、弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なきゆゑにと云々。

阿弥陀仏の誓願の思議を絶したおはからいに救われて、往生をとげさせていただくと思ひて、念仏を申そうと思ひたつ心がおこる、そのとき、すでに阿弥陀仏は大悲の光明の中におさめ取りたまひ、決して見捨てぬといふ救ひの利益にあずからしてくださいませ。

阿弥陀仏の本願には、老人も若者も、善人も悪人も、いかなる人もわけへだてなさいませぬ。ただその本願の救ひをはからいなく領解する信心が肝要であると知るべきです。本願が老少、善悪をへだてたまわぬといふことは、深く重い罪悪をもち、もえさかるほのおのような煩惱をかかえて生きる人をもらさずに救うためにおこされた誓願であらせられるからです。

ですから本願を信じたうえは、救われるために他のどのような善行も必要としませぬ。如来よりたまわつた本願の念仏にまさるほどの善はないからです。また悪もおそれるに及びませぬ。阿弥陀仏の本願の救ひをさまたげるほどの悪はないからである、と仰せられました。

第二条（往生極樂の道）①

おのおのの十餘箇国じゅうよかこくのさかひをこえて、身命しんみょうをかへりみずして、たづねきたらしめたまふ御ごころざし、ひとへに往生極樂のみちを問ひきかんがためなり。

しかるに念仏ねんぶつよりほかに往生のみちをも存知ぞんちし、また法文等ほうもんどうをもししりたるらんと、こころにくくおぼしめしておはしましてはんべらんは、おほきなるあやまりなり。

もししかれば、南都北嶺なんとほくれいにもゆゆしき学生がくしょうたちおほく座おわせられて候ふなれば、かのひとにもあひたてまつりて、往生の要よくよくきかるべきなり。

親鸞しんらんにおきては、ただ念仏して弥陀みだにたすけられまゐらすべすと、よきひと（法然）の仰せをかぶりて信ずるほかに別の子細しさいなきなり。念仏は、まことに浄土じやうどに生まるるたねにてやはんべるらん、また地獄ぢやくにおつべき業ごうにてやはんべるらん。

総じてもつて存知せざるなり。たとひ法然上人ほふぜんじやうじんにすかされまゐらせて、念仏して地獄ぢやくにおちたりとも、さらに後悔こうかいすべからず候ふ。

【意識】

あなた方が、十幾つもの国々をこえ、いのちの危険もかえりみず、わたしを訪ねてきてくださった、その目的は、極樂ごくらくに生まれてゆく道を問いただきたいという、ただその一事のためでした。

ところが、もしあなたがたが、親鸞しんらんは念仏以外ねんぶつがいにあるいは往生じやうじやうに関する特別とくべつの教説きやうせつなども知っていないのではないか、その真相しんじやうを知りたいものだと思つておられるのでしたら、それは大きな誤解ごかいです。

もしそういうことを聞きたいのならば、南都なんと（奈良の興福寺きやうふくじなどの諸大寺）や、北嶺ほくれい（比叡山ひえいざん）には、念仏以外ねんぶつがいの道みちや教義きやうぎの研究けんぎゆをしている、すぐれた学僧がくそうたちがたくさんおいでになるから、その人々ひとびとにでもお会いになつて、往生じやうじやうについて肝要かんような教えをくわしくおたずねになるがよろしい。

親鸞しんらんにおいては、ただひとすじに念仏ねんぶつして、阿弥陀あみだにたすけていただきなさいと教えたもうたよき人ひと、法然上人ほふぜんじやうじんの仰せをいただいて信じているだけで、そのほかの特別とくべつのわけなどありません。

念仏ねんぶつするものは地獄ぢやくにおちると、いいおどす人々ひとびとがいるとのことですが、念仏ねんぶつが、本当に浄土じやうどに生まれる因いん（たね）であるのか、それとも地獄ぢやくにおちる業ごう（因いん）であるのか、わたしはまったく知りません。

かりに法然上人ほふぜんじやうじんにあざむかれて、念仏ねんぶつして地獄ぢやくにおちたとしても、しかしわたしは決して後悔こうかいはいたしません。

それというのも、ほかの修行しゆぎやうをはげんだならば仏ぶつになられたはずの身みが、念仏ねんぶつを申したばかりに地獄ぢやくにおちたとでも言うのならば、あざむかれた、という後悔こうかいもありましようが、いずれの修行しゆぎやうにもたえられない愚悪ぐあくの身みには、

そのゆゑは、自余の行はげみて仏になるべかりける身が、念仏を申して地獄におちて候はばこそ、すかされたてまつりといふ後悔も候はめ。

いづれの行もおよびがたき身となれば、**とても地獄は一定すみかぞかし。**

弥陀の本願まことにおはしまさば、善導の御釈おんしやく虚言きょげんしたまふべからず。善導の御釈まことならば、法然の仰せそらごとならばや。法然の仰せまことならば、親鸞が申すむね、またもつてむなしかるべからず候ふか。

詮せんずるところ、愚身ぐしんの信心におきてはかくのごとし。このうへは、念仏をとりて信じたてまつらんとも、またすてんとも、面々の御はからひなりと云々。

【意 訳】

しよせん、地獄こそ定まれるすみかであるといわねばなりません。

しかし、このような愚悪ぐあくの身を救おうとおぼしめして、念仏を往生の道と選び定めたもうた、弥陀の本願がまことであらせられるならば、その仏説に随順して本願念仏のころをあらわされた、善導大師の御釈にうそのあるはずがありません。善導大師の御釈がまことであるならば、ひとえに善導大師の教えに準拠じゆんこして説き示された法然上人の念仏のみ教えが、どうしてうそいつわりでありましょう。法然上人の仰せがまことであるならば、その教えのままに信じているこの親鸞の申すこともあながちにいたざらごとではありますまい。つづまるところわたしの信心は、この通りです。このうへは、念仏の教えをうけいれて信じてゆかれるか、それともまた縁なき道としてお捨てになるかは、あなたがた一人一人のお心のままになさるがよろしい、と仰せられました。

善人なほもつて往生をとぐ、いはんや悪人をや。

しかるを世のひとつねにいはく、「悪人なほ往生す、いかにいはんや善人をや」。この条、一旦そのいはれあるに似たれども、本願他力の意趣にそむけり。そのゆゑは、自力作善のひとは、ひとへに他力をたのむところかけたるあひだ、弥陀の本願にあらず。しかれども、自力のころをひるがへして、他力をたのみたてまつれば、眞実報土の往生をとぐなり。

煩惱具足のわれらは、いづれの行にても生死をはなるることあるべからずを、あはれみたまひて願をおこしたまふ本意、悪人成仏のためなれば、他力をたのみたてまつる悪人、もつとも往生の正因なり。よつて善人だにこそ往生すれ、まして悪人はと。仰せ候ひき。

善人ですら往生をとげるのです。まして悪人が往生をとげられないことがありますか。

しかるに世間の人は常に、悪人すら往生するのだから、まして善人が往生しないことがあるか、といつています。この考え方は、一応もつともなようですが、阿弥陀仏の本願他力の救いのみころには背いています。

そのわけは、自力をもつて作なした善行をたのんで往生しようとしているような善人は、阿弥陀仏の本願力だけを、ひとえにたのみ、おまかせをするという信心のない人ですから、本願のみころにかないません。けれども、そういう人も、わが身の善をたのむきょうまん 慢まんな自力の心を改めて、阿弥陀仏の本願他力をたのみ、おまかせするならば、本願力の御はからいによって、眞実の悟りの境きょうがい 界である眞実報土に往生をとげさせていただくことができます。

あらゆる煩惱を、身にそなえている私どもは、どのよような修行をしてみても、生と死の迷いから離れることができないことを憐れみたもうて、たすけようという願いをおこされたのが阿弥陀仏でした。その本願の御本意は、煩惱具足の悪人を救うて、完全な仏陀にならしめるためですから、本願をたのみ、他力にまかせつきている悪人こそ、第一に往生すべきものです。それゆえ、善人でさえも往生をさせていただくのだもの、まして悪人はなおさらのことであると、仰せられたことでした。

第四条（ほんとうの慈悲）

慈悲に聖道・浄土のかはりめあり。

聖道の慈悲といふは、ものをあはれみ、かなしみ、はぐくむなり。しかれども、おもふがごとくたすけとぐること、きはめてありがたし。

浄土の慈悲といふは、念仏して、いそぎ仏に成りて、大慈悲心をもつて、おもふがごとく衆生を利益するをいふべきなり。

今生に、いかにいとほし不便とおもふとも、存知のごとくたすけがたければ、この慈悲始終なし。しかれば念仏申すのみぞ、すゑとほりたる大慈悲心にて候ふべきと云々。

【意 訳】

慈悲ということについて、聖道門で勧めているような慈悲と、浄土門で語る慈悲と違いがあります。慈悲とうことは、苦しみ悩む人をあわれにおもい、いとおしみ、守り育てることですが、聖道の慈悲というのは、自力の力で、人々を苦しみから救いあげて、安らかな幸せを与えようとすることをいいます。しかし凡夫がどんなにとめても、思い通りに助けとげるのは至難のことです。

浄土門で慈悲を語る場合は、自分が本願を信じ念仏して、すみやかに仏のさとりを得させていただいて、その上で大慈悲大悲心をおこして、思いのままに一切の衆生を救い真実の利益を与えることをいふべきです。

この世に凡夫として生きてあるかぎり、どんなにいたわしい、かわいそうだと思っても、思い通りに助けることはできないから、わが力によって、この世で人々を救おうと願う慈悲は中途半端なものでしかありません。そういうわけですから、本願を信じて念仏を申すことだけが、ほんとうに徹底した大慈悲心だといえましょう。と仰せられました。

第五条（追善供養をこえて）

【意 訳】

親鸞は父母ぶもの孝養きやうようのためとて、一辺にても念仏申したること、いまだ候はず。

そのゆゑは、一切うじようの有情はみなもうて世々せせしやうじやう生々の父母・兄弟なり。いづれもいづれも、この順次生に仏に成りてたすけ候ふべきなり。

わがちからにてはげむ善にも候はばこそ、念仏を回向して父母をもたすけ候はめ。

ただ自力をすてて、いそぎ浄土のさとりをひらきなば、六道ししやう・四生のあいだ、いづれの業苦にしづめとも、神通方便をもつて、まず有縁を度すべきなりと云々。

親鸞聖人は、亡き父母に孝養を尽くすために追善供養する、というような意味をこめて念仏を申したことは一度もありません。

そのわけは、すべての生きものは、みな果てしもない遠い昔から、生まれかわり死にかわり、無数の生存を繰り返してきたものです。そのあいだには、お互いに、あるときは父ともなり、母ともなり、またあるときは兄ともなり、弟ともなりあったことがあるにちがいありません。生きとし生けるものは、みななつかしい父母・兄弟なのです。この生を終わって、次の生で浄土に生まれ、仏陀になったときには、一人ものこさず救わなければならないものばかりだからです。

それに念仏が、自分の力をはげまして積んでゆく善根功德であつてこそ、その念仏を父や母に施し与えて助けるということもありましょう。しかしそうではありませんから、念仏を追善の資とすることはできません。

一筋の自力のはからいをすてて、本願他力に身をゆだね、浄土に往生をして、すみやかに仏陀としての悟りを開いたならば、父や母が、たとえ六道の迷いの境界にあつて、さまざまな生を受け、苦しみの中に沈んでいたとしても、悟れるもののみもつ、超人的な救済力と、巧みなてだてをもつて、なにはさておいても、まずこの世でことに縁の深かったものから救うてゆくはずです、と仰せられました。

第六条（弟子一人ももたず）

専修念仏せんじゅうのともがらの、わが弟子、人の弟子という相論の候ふらんこと、もつてのほかの子細なり。

親鸞は弟子一人ももたず候ふ。

そのゆゑは、わがはからひにて、ひとに念仏を申させ候はばこそ、弟子にても候はめ。弥陀の御もよほしにあずかつて念仏申し候ふひとを、わが弟子と申すこと、きはめたる荒涼こうりょうのことなり。

つくべき縁あればともなひ、はなるべき縁あればはなるることのあるをも、師をそむきて、ひとにつれて念仏すれば、往生すべからざるものなりなどいふこと、不可説なり。如来よりたまはりたる信心を、わがものがほに、とりかへさんと申すにや。

かへすがへすもあるべからざることなり。自然じねんのことわりにあいかなはば、仏恩をもしり、また師の恩をもしるべきなりと云々。

【意識】

本願を信じ念仏一行を専修する人たちのなかで、自分の弟子だ、人の弟子だというような言い争いがあるようですが、それは思いもよらないこととです。

親鸞は弟子一人ももっていません。

そのわけは、私のはからいによつて人に念仏を申させているのであれば、その人をわが弟子ともいえましようが、阿弥陀仏の御はからいによつて念仏を申しおられる人を、私の弟子であるということは、この上もなくぶしつけなことです。

人の融合は思いのままにならないもので、一緒に連れ添うべき縁があれば連れとなり、離れねばならない縁にもよおされたならば離れていくこともありますのに、「師に背いて、他の人に従つて念仏するようなものは、浄土に往生することではきない」などということは言語道断です。阿弥陀如来から賜った信心を、自分が与えたもののように、取り返そうとでもいうのでしようか。そんなことは決してあつてはならないことです。

しかしよくよくみ教えを聞き、本願他力の道理に従つていくならば、おのずと、阿弥陀仏の御恩も知り、また本願をたのめと教えてくれた師の恩をも知るようになるはずと仰せられました。

第七条（無碍の一道）

念仏は無碍の一道なり。

そのいはれいかんとならば、信心の行者には天神・地祇も敬伏し、魔界・外道も障碍することなし。

罪悪も業報を感じることあたはず、諸善もおよぶことなきゆゑなりと云々。

【意 訳】

阿弥陀仏の本願を信じて念仏する人は、何ものにも碍えられることなく、生と死を超える唯一の大道を往くものです。

なぜならば、阿弥陀仏のみ名を称えつつ生きる信心の行者に対して、天地の善神たちは尊敬し、悪神たちはひれ伏します。人の心を乱し、さとりのみまたげをなすという悪魔も、仏教以外の宗教も、念仏者の歩みをさまざまげ、まどわすことができません。また念仏は、どんな罪人も障りなく救う徳をもっていますから、過去におかした罪業も、その報いを受けさせることができないし、どのような自力の善も念仏にまさることはないからですと仰せられました。

第八条（他力の念仏）

念仏は行者のために非行・非

善なり。わがはからひにて行ずるにあざれば非行といふ。わがはからひにてつくる善にもあざれば非善といふ。

ひとへに他力にして自力をはなれたるゆゑに、行者のためには非行・非善なりと云々。

【意 訳】

念仏は、名号を称えている私どもの立場からいえば行でもなく、善でもありません。南無阿弥陀仏と称えて往生の行にしようとして、自分ではからい決めて行おこなっているような行ではないから、行ではないのです。また名号を称えて善根功徳を積み重ねていこうとはからっているわけではありませんから、善ではないのです。

念仏は、阿弥陀仏から回向された完全な他力の行であつて、称えるものの自力をはからないものであるから、私どもの立場からいえば、行でもなく、善でもないのと仰せられました。

第九条（他力の悲願）①

念仏申し候へども、踊躍ゆやく歡喜かんぎのころおろそかに候ふこと、またいそぎ浄土へまゐりたきころに候はぬは、いかにと候ふべきことにて候ふやらんと、申し候ひしかば、親鸞おんねんもこの不審ふしんありつるに、唯円房ゆいえんぼうおなじころにてありけり。よくよく案じみれば、天にをどり地にをどるほどによろこぶべきことを、よろこばぬにて、いよいよ往生は一定とおもひたまふなり。よろこぶべきころをおさへて、よろこばざるは煩惱ぼんノウの所為しよゐなり。しかるに仏かねてしるしめて、煩惱ぼんノウ具足の凡夫ぼんノウと仰せられたることなれば、他力の悲願はかなくのごとし、われらがためなりけりとしられて、いよいよたのもしくおぼゆるなり。

また浄土へいそぎまいりたきころのなくて、いささか所勞しよらうのこともあれば、死なんざるやらんところぼそくおぼゆることも、煩惱ぼんノウの所為しよゐなり。久遠くおん劫ごうよりいままで流轉るてんせる苦惱きまうの旧里きゅうりはすてがたく、いまだ生まれざる安養浄土はこひしからず候こと、まことによくよく煩惱ぼんノウの興盛こうじやうに候ふ

【意識】

「念仏を申し候ひますが、喜びの心は薄く、天におどり地におどる喜びの心が湧わいていませんし、また急いで浄土へまいりたいと思う心が起つてこないのは、どういふわけでしょうか」と、おたずね申しあげたところ、

聖人は、「親鸞もそれをいぶかしく思つていたが、唯円房、そなたも同じ心であつたか。よくよく考えてみると、天におどり地におどるほど喜ばねばならないことを、そのように喜ばないわが身を思うにつけても、いよいよ往生は一定いちじやうの身であると思ひます。というのは、喜ぶべき尊いおみのりをいただいて、喜ぼうとする心をおさえとどめて喜ばないのは、煩惱ぼんノウのしわざです。しかるに仏は、このような私であることをかねてからお見とおしので、煩惱ぼんノウ具足の凡夫ぼんノウを救おうと仰せられておられるところですから、他力の悲願は、このように浅ましい私どものためであつたと気づかされてますますたのもしく思われます。

また急いで浄土へ参りたいというよな思ひがなくて、ちよつとした病氣でもすると、もしや死ぬのではなからうかと心細く思うのも煩惱ぼんノウのしわざです。久遠くおんの昔むかしから、ただ今まで流轉るてんしつづけてきた迷いの古里ふるさとは、苦惱くまうにみちているのに捨てにくく、まだ生まれたことのない浄土は、安らかな悟りの境界きやうがいであると聞かされていても、慕わしく思えないということは、よくよく煩惱ぼんノウのほげしい身であるといわねばなりません。まことに名残はつきませんが、娑婆しやばにあるべき縁が尽きて、どうにもならなくてこの世を終るときに、かの浄土へは参るはずのものです。いそいで参りたいという殊勝しよしょうな心のないものを仏はことにふびんに思われているのです。それを思うにつけても、い

第九条（他力の悲願）②

にこそ。なごりをしくおもへども、娑婆しやばの縁尽きて、ちかちかなくしてをはるときに、かの土へはまいるべきなり。いそぎまいりたきころなきものを、ことにあはれみたまふなり。これにつけてこそ、いよいよ大悲願はたのもしく、往生は決定けつじようと存じ候へ。踊躍ゆやく歡喜かんぎのころもあり、いそぎ浄土へもまありたく候はんには、煩惱のなきやらんと、あやしく候ひまなしと云々。

第十条（はからいの誠め）

念仏は無義をもつて義とす。不可称不可説不思議のゆゑにと仰せ候ひき。

そもそもかの御在生ございじようのむかし、おなじくころざしをして、あゆみを遼遠りようえんの落陽にはげまし、信をひとつにして心を当来とうらいの報土にかけしともがらは、同時に御意趣ごいしゆをうけたまはりしかども、そのひとびとにともなひて念仏申さるる老若、そのかずをしらずおはしますなかに、上人（親鸞）の仰せにあらざる異義どもを近來きんらいはおほく仰せられあうて候ふよし、伝へうけたまはる。いはれなき条々の子細のこと。

【意 訳】

いよいよ大悲の本願はたのもしく仰がれ、この度の往生は決定であると思いたまうべきです。

念仏するにつけて、天地におどりあがるほどの喜びもあり、また急いで浄土へ参りたいと思うようならば、自分には煩惱がないのであろうかと、かえつていぶかしく思うでしょう」と仰せられました。

【意 訳】

本願の念仏を申すには、自力のはからいをさしはさまなということの本義とする。如来が万人の行として選び定めたまうた本願他力の念仏を、仏以外のだれであっても量ることはできないし、説き尽くすこともできないし、思いはからうこともできないからであると仰せられました。思えばもう昔のことになりますが、親鸞聖人の御在世のころ、ともに往生極樂の道をお聞かせにあずかろうと、同じ志をもつて、関東からはるかにへだたった遠い京洛の地へ歩みをはこんで聖人におめにかかり、一筋に本願を信じ、この生涯の終わるときには、阿弥陀仏のいます真実浄土へ生まれさせていただけようと、往生を期しつつ生きた人びとは、同じ時に同じ本願のいわれをうけたまわり、聖人の御本意を聞き伝えたことでした。

しかし、この人々の教化を受けて念仏を申されるようになった数え切れないほどのたくさんのお老若のなかには、親鸞聖人の仰せでない異義を主張するものが近ごろは多くおられると聞いております。それらが正しい根拠をもたない憶説であるということを、一つひとつ述べていきましよう。

右条々は、みなもつて信心の異なるよりことおこり候ふか。

故聖人（親鸞）の御物語に、法然上人の御とき、御弟子そのかずおはしけるなかに、おなじく御信心のひともすくなくおはしけるにこそ、親鸞、御同朋の御なかにして御相論のこと候ひけり。

そのゆゑは、「善信（親鸞）が信心も聖人（法然）の御信心も一つなり」と仰せの候ひければ、勢観房・念仏房など申す御同朋達、もつてのはかにあらずひたまひて「いかでか聖人の御信心に善信房の信心、一つにあるべきぞ」と候ひければ、

「聖人の御智慧・才覚ひろくおはしますに、一つならんと申さばこそひがことならめ。往生の信心においては、まづたく異なることなし、ただ一つなり」と御返答ありけれども、

なほ「いかでかその義あらん」といふ疑難ありければ、詮ずるところ、聖人の御まへにて自他の是非を定べきにて、この子細を申しあげければ、法然聖人の仰せには、「源空

右の各条にあげたさまざまな意義は、いずれも法然、親鸞両聖人の信心と異なつた、各人各様の信心をもっているために生じてきたことのようにです。いまはなき親鸞聖人からうけたまわつた話ですが、法然聖人の御在世のころ、たくさんのお弟子がおられました。法然聖人と同じ信心をもっている人はわずかしかおられなかつたために、親鸞聖人が、同門の兄弟弟子たちと論争をされたこともありました。

それは、親鸞聖人（善信房）が「この善信の信心も、法然聖人の御信心もまったく同じである」といわれたところ、勢観房や念仏房などと申される同門の方がたが、もつてのほかのことだと反対されて、「師である聖人の御信心と、末弟に過ぎない善信坊の信心が、まったく同じであるなどということがどうしてあり得ようか」といわれまして、たので、

親鸞聖人も「師の聖人がおもちになつていような広く深いお知恵や学識と同じであるなど申すのならば、それは道理にはずれた言い分でしょうが、念仏往生の本願を疑いなく信ずる往生の信心に関するかぎりは、まづたく異なることはありません。ただ一つです」と御返答されました。

けれども、なお「どうしてそのような道理があるのか。智慧や学問がちがえば、当然信心にも浅い深いのちがいはあるはずだ」と疑いなじられるので、おさまりがつかなくなり、最終的には法然聖人の御前へいき、自他のどちらの言い分が是非かを定めていただこうということになって、聖人にことの詳しいいきさつを申しあげたところ、法然聖人の仰せられるには、「この源空（法然）の信心も、阿弥陀仏からたまわつた信心です。」

が信心も、如来よりたまはりたる信心なり、善信房の信心も、如来よりたまはせたまひたる信心なりされば、ただ一つなり。別の信心においておはしまさんひとは、源空がまゐらんずる浄土へは、よもまゐらせたまひ候はじ」と仰せ候ひしかば、当時の一向専修いっこうせんじゆのひとびとのなかにも、親鸞の御信心に一つならぬ御ことも候ふらんとおぼえ候ふ。

善信房の信心も、如来よりたまわられた信心です。それゆえ、往生の信心はまったく同じです。もし異なつた信心をもつておられるような方は、源空がまいろうとしてゐる浄土へは、よもやまいられることはありませんまい」と仰せられたところからすれば、直接法然聖人の教えをうけて、念仏一行を専修しておられたその当時の人々のなかにも、親鸞聖人の御信心と同じでない信心をもつてゐる方がおられたように思われます。

いづれもいづれも繰り言にて候へども、書きつけ候ふなかり。露命わづかに枯草の身にかかりて候ふほどにこそ、あひともなはしめたまふひとびと「の」御不審をもうけたまはり、聖人（親鸞）の仰せの候ひし趣を申しきかせまいらせ候ども、閉眼ののちは、さこそしどけなきことどもにて候はんずらめと、嘆き存じ候ひて、かくのごとくの義ども、仰せられあひ候ふひとびども、いひまよはされなんどせらるることの候はんときは、故聖人（親鸞）の御ところにあひかなひて御もちる候ふ御聖教どもを、よくよく御覧候ふべし。おほよそ聖教には、真実・権仮ともにあひまじはり候ふなり。権をすてて実をとり、仮をさしおきて真をもちいるこそ、聖人（親鸞）の御本意にて候へ。かまへてかまへて、聖教をみ、みだらせたまふじく候ふ。大切の証文ども、少々ぬきゐでまいらせ候うて、目やすにしてこの書に添へまゐらせて候ふなり。

いろいろ申しあげましことは、いづれも老いのくりごと、めずらしいことでもありませんが、書きつけました。

露のような、はかないのちが、枯れ草のような老いの身に、それでもわずかに保たれているあいだならば、もろともにこの念仏の道を歩んでおられる方がお尋ねもうけたまわり、聖人が仰せられたみ教えのころをお聞かせ申しあげることでもできますが、私が眼を閉じてしまったあとは、さぞかし意義がはびこり、しまりのない状態になるであろうと嘆かわしく思ひまして、もしも上に述べたようなさまざまな異議を主張しあっている人々に、いいまどわされることがありましたならば、亡き親鸞聖人が、み心になつてもちいられていたらお聖教などを、よくよくご覧ください。

およそお聖教には、仏のみころにかなう真実の教説と、本心をかくして相手に応じて教育的手段として仮に説き与えられた権仮方便の教説とか相混じっています。その権仮の説をさしおいて、真実の説をもちいることこそ、聖人の御本意にかなうことです。よくよく注意して、お聖教の趣旨を読み違えないようにしてください。

聖人の御本意を知るために大切な証拠となる文章を、少しばかり抜きだして箇条書きにしてこの書に添えました。正義と異議を批判する標準にしていたきたい。

聖人（親鸞）のつねの仰せには、

「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり。されば、それほど業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」

と御述懐候ひしことを、いままた案ずるに、善導の

「自身はこれ現に罪悪生死の凡夫、曠劫よりこのかた、つねにしずみ、つねに流転して、出離の縁あることなき身としれ」（散善義）

という金言に、すこしもたがはせおはしませず。

さればかたじけなく、わが御身にひきかけて、われらが身の罪悪のふかきほどをもしらず、如来の御恩のかきことをもしらずして迷へるを、おもひしらせんがためにて候ひけり。

親鸞聖人がつねづね仰せられていたことですが、

「阿弥陀仏が、五劫のあいだ思惟してたてられた本願を、よくよく味わってみますと、それはひとえにこの親鸞一人のためだったのですね。思えばそれほど重い罪業をもっている身でありますものを、助けようと思いたってくださいった本願の、なんともつたないことか」

と深いお心のうちをお述べくださったことを、今また改めて味わってみますと、善導大師が「自身は現さまざまな罪悪をおかし、生と死に迷い苦しんでいる凡夫で、はてしない過去から、つねに苦海に沈み、つねに迷妄の境界を流転してきたものであつて、迷いを超え出て、悟りを開くことができるような手がかりさえもない身である」と知れ」と仰せられた、あの尊いみ言葉と少しも異なつたところはございません。

それゆえにまことにもつたないことですが、これはご自身にひきよせて、私どもが、自分の罪悪の深いことも知らず、このような身を救いたまう如来のご恩がどれほど高く尊いものであるかも知らずに迷っているのを、思い知らされるための仰せだつたと思ひます。

まことに如来のご恩といふことをば沙汰なくして、われもひともしあしといふことをのみ申しあへり。

聖人の仰せには、「善悪のふたつ、総じてもつて存知せざるなり。そのゆゑは、如来の御ところに善しとおぼしめすほどにしりとほしたらばこそ、悪しさをしりたるにてもあらめど、煩惱具足の凡夫、家宅無上の世界は、よろづのこと、みなもつてそらごとたはごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにしておはします」とこそ仰せは候ひしか。

まことに、われもひともしらごとをのみ申しあひ候ふなかに、ひとついたましきことの候ふなり。そのゆゑは、念仏申すについて、信心の趣をもたがひに問答し、ひとにもいひきかするとき、ひとの口をふさぎ、相論をたたんだために、まつたく仰せにてなきことをも仰せとのみ申すこと、あさましく嘆き存じ候ふなりこのむねをよくよくおもひとき、こころえらるべきことに候ふ。

これさらにわたくしのことばにあらざといへども、経釋

まことに私どもは、如来のご恩といふことを問題にせず、われもひともし善だ、悪だと他の批判ばかりをしあつています。

親鸞聖人の仰せに「何がほんとうに善であるのか、悪であるのか善悪のふたつながら、私は全く知りません。それというのも、如来がすべてを知りとおす智慧をもつて、これは善であると思し召されていられるほど徹底して知っているのであれば、善を知ったことにもなりましょうし、如来が、これは悪であると思し召すほどに徹底して知っているのであれば、悪を知ったことにもなりましょう。けれども、私はさまざまな煩惱をことごとく具えている凡夫であり、この境界はまるで火のついた家のように危険にみち、変化してやまない無上の世界です。こうした無上の境界を、煩惱を燃やしながら生きる凡夫のいとなみは、あらゆることが、みなことごとく空しい虚構であり、いつわりごとであつて、まことのこととは、何一つありません。そんななかにあつて、ただ本願の念仏だけが、煩惱のけがれを超え、永遠に変わることはない真実であらせられます」と仰せられました。

ほんとうに、われも人も、うそいつわりばかりを申していますが、その中でとりわけ心のいたむことが一つあります。それは、念仏を申すについて、その信心のいわれをたがいにたずねあい、また人にも説いて聞かせるときに、相手にものをいわず、議論をうちきるために、全く聖人の仰せでないことであるといはることで、まことにあさましく、なげかわしくおもいます。この趣旨を充分理解し、お心得いただきたい。

以上もうしてきたことは、決して私個人の独断的な言葉ではありませんが、なにぶん経典や論釈

の往く路じもしらず、法門の浅深せんじんをこころえわけたることも候はめども、さだめてをかしきことにてこそ候はねば、さだめてをかしきことにてこそ候はめども、古親鸞の仰せごとき候ひし趣、百聞が一つ、かたはしばかりをもおもひいでまゐらせて、書きつけ候ふなり。かなしきかなや、さいはひに念仏しながら、直に報土に生まれずして、辺地へんじに宿をとらんこと。一室の行者のなかに、信心異なることならんために、なくなく筆を染めてこれをしるす。なづけて『歎異抄』といふべし。外見あるべからず。

【意 訳】

のすじ道も知らず、教義の浅深を見分けるほどの力量もない愚かなものが記したことですから、きつとおかしい点もありましょうが、いまはなき親鸞聖人がおおせくださったみ教えの百分の一にもたらない、ほんのその一端だけを思い出して書きつけたような次第です。

さいわいにもあいがたい教えにあい、せつかく念仏を申しながら、ただちに阿弥陀仏のおさとりの境地である真実の報土に生まれることができないで、自力のはからいゆえに極楽の辺地とよばれる方便の浄土につどまるといふことは、何という悲しいことでしょう。同じ親鸞聖人の流れをくむ同門の行者のなかに、聖人の信心と異なるというようなことがないようにと念じ、悲しみの涙をぬぐいながら筆をそめ、これを記しました。それゆえ『歎異抄』と名づけることにしましょう。念仏にこころざしのない人には見せないようにしてください。

